

**静岡市・蒲原町合併協議会
静岡市・由比町合併協議会
住民意見発表会 議事録**

平成17年1月16日

静岡市・蒲原町合併協議会事務局

静岡市・由比町合併協議会事務局

目 次

1	意見発表会概要	1 頁
2	由比会場	2 頁
3	蒲原会場	2 5 頁

住民意見発表会概要

1 開催目的

静岡市・蒲原町合併協議会及び静岡市・由比町合併協議会では、平成17年1月28日の合併の是非決定に向けて、住民説明会を開催し、住民との意見交換を通じて意向の把握に努めてきたが、この意向把握に万全を期すため「住民意見発表会」を開催した。

2 発表者応募期間

平成16年11月1日(月)から11月19日(金)まで

3 応募状況

	静岡市	蒲原町	由比町	計
賛成	2	3	2	7
反対	-	1	2	3
その他	2	-	-	2
計	4	4	4	12

蒲原町の反対の立場の応募者1名は、本人の都合により欠席。

4 開催日時

- (1) 由比会場 平成17年1月16日(日) 午後1時30分～3時
(2) 蒲原会場 " 午後4時～5時30分

5 開催場所

- (1) 由比会場 由比町中央公民館 2階大ホール
(2) 蒲原会場 蒲原町文化センター 4階大会議室

6 次第

- (1) 開会
(2) 正副会長挨拶
(3) 意見発表者紹介
(4) 意見発表
(5) 閉会

7 出席者

- (1) 由比会場 意見発表者 6名(静岡市民2名、由比町民4名)
静岡市・由比町合併協議会委員 全13名
(2) 蒲原会場 意見発表者 5名(静岡市民2名、蒲原町民3名)
静岡市・蒲原町合併協議会委員 全13名

8 一般傍聴者

- (1) 由比会場 250名
(2) 蒲原会場 130名

由 比 会 場

1 開催日時 平成17年1月16日(火)午後1時30分から3時まで

2 開催場所 由比町中央公民館2階大ホール

3 次第 (1) 開 会
(2) 正副会長挨拶
(3) 意見発表者紹介
(4) 意見発表
(5) 閉 会

4 出席者 (1) 意見発表者(敬称略)

	氏 名	住 所	合併に対する立場
	望月 達也	由比町	賛 成
	磯谷 千代美	静岡市	その他
	吉岡 清	由比町	反 対
	守屋 秀子	静岡市	賛 成
	青木 由紀子	由比町	反 対
	笹間 吉久	由比町	賛 成

(2) 静岡市・由比町合併協議会

小嶋会長、望月副会長、
鈴木委員、剣持委員、濱崎委員、藤浪委員、杉山委員、
安部委員、佐野委員、佐藤委員、小林委員、豊島委員、
斉藤委員 (全13名出席)

5 発表会内容 以下のとおり

【開会】

司会 ただいまから、静岡市・蒲原町合併協議会及び静岡市・由比町合併協議会 住民意見発表会を開催いたします。

本日は大変お忙しい中、静岡市・蒲原町合併協議会及び静岡市・由比町合併協議会の主催によりまして住民意見発表会に御参加いただきまして、誠にありがとうございました。

さて、合併協議会では、今月28日に開催されます第10回合併協議会におきまして、合併の是非が決定をされます。この是非決定に向け、住民の皆様の意向把握のために、静岡市、蒲原町及び由比町におきまして、各市町、それぞれ各2回、計6回の住民説明会を開催してまいりました。

本日の住民意見発表会は、住民説明会に加えまして、特に意見を希望される住民の皆様の発表の機会といたしまして開催するものであります。皆様の率直な御意見を拝聴したいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

【正副会長挨拶】

司会 それでは意見発表会の開催に当たりまして、合併協議会の正副会長から御挨拶を申し上げます。

まず、静岡市・蒲原町合併協議会及び静岡市・由比町合併協議会の会長であります小嶋静岡市長から御挨拶申し上げます。

小嶋会長（静岡市長） 皆さん、こんにちは。両合併協議会の会長を務めております小嶋でございます。本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

司会から話がありましたように、この意見発表会は、今我々が取り組んでおります合併問題について、住民の皆さんの意見を聞く会でございます。この合併協議会は、1月28日に最終の会議が開かれまして、そこで合併の是非かを、それぞれ2つの合併協議会が決めます。是となれば、その後は、それぞれの自治体が議会の同意を得られるかどうかという手続に入っていくわけでありまして、したがって、今現在、最終段階に来ているという状況でございます。

この合併協議会は、それぞれ昨年の4月に設置されまして、極力情報公開をしようということで、これまで9回の協議を行ってまいりました。昨年の12月には、直接住民の皆さんに説明をし、意見を聴くということもさせていただきました。いずれにしましても、この問題については、住民の皆さんの気持ちはいろいろおありだろうと思いますが、我々としまして

は、くれぐれも、ひとつこの町の将来を考えたご決断をいただきたいし、それが今回の一番大きなポイントではないかと思えます。

御存じのように、静岡と清水は1年9か月ほど前に合併をいたしまして、いよいよこの4月から政令指定都市に移行となります。今現在、参考のために申し上げておきますと、私が市政を担当して思いますことは、今回の静岡と清水の合併は、実は4つメリットがあったと思えます。

1つ目は、合併によりまして大幅なコスト削減に成功したことです。管理部門の統合によりまして2年間で2百数十人の人員削減、人件費にして約27億円の削減に成功いたしました。

それから2つ目は、両市にとって長年の悲願でありました政令指定都市に移行することができるということです。何と云っても、これから自治体間の様々な競争の時代を迎えることを考えますと、自立した自治体として生き残っていくための大きな力を得たと思っております、これが大きなメリットだったと思えます。

3つ目のメリットについてですが、清水地区は、御存じのようにごみの処理に大変困っておりました。現在、清水地区の住民の皆さんのごみの30%以上を静岡側の処理場で処理することができるということで、ごみの問題は解決をいたしました。

それから4つ目のメリットですが、清水地区は、興津川の表流水が唯一の水源でありましたが、あと2年ほどで静岡側の安倍川の伏流水、これはかなり余裕がありますので、これを清水地区に送水することによって、清水地区の水の問題も解決をいたします。

これは静岡・清水、お互いに持っている力を出し合って、お互いにいいところを取り合って、今以上に市民生活が安心・安全になるように、またコストの削減も図れるようにということで、静岡と清水の合併については、こんなによい合併はなかったと、今、市長をやっております、感じております。

ただ、細かい部分の両市の歴史、伝統文化など様々な違いはやはりあります。それを一つ一つ乗り越える努力をしているところでありますが、何と云っても、やはり合併というのは現状のことよりも将来のことを見据えて判断、決断することが大事だということが、我々は、今回経験してつくづく感じているところであります。何とぞ皆さんにおかれましても、そういう見地で御判断をいただければと思えます。

因みに我々静岡としては、由比も蒲原の皆さんも同じ圏域の仲間という意識でございます。できれば、我々静岡側としては一緒になってやっていければいいのではないかという気持ちでありますので、最後につけ加えさせていただきました。よろしく申し上げます。ありがと

うございました。

司会 続きまして、静岡市・由比町合併協議会副会長であります望月由比町長から御挨拶申し上げます。

望月副会長（由比町長） 皆さん、こんにちは。御紹介賜りました静岡市・由比町合併協議会の副会長を仰せつかっております由比町長の望月でございます。

本日は、静岡市・蒲原町及び静岡市・由比町の合同によります住民意見発表会を開催いたしましたところ、町内外からこんなにも多くの方においでをいただきまして、この会が開催できますことに、心から御礼を申し上げたいと思っております。

ただいま会長であります静岡市長のほうから説明があったわけではありますが、この1月28日に、合併協議会の中で合併の是非を問う、結論を出す時期に来ているところであります。

由比町のことを少しお話させていただきますけれども、由比町がこの合併協議会を立ち上げるについて、いろいろ住民の声をいただいたわけでありまして。しかしながら、いろいろ議会との話の中で、最終的には私、町長の発議によります住民投票を実施したわけでありまして。そうした中で、この合併協議会、それは合併をもしするとすれば、こういう形ですり合わせをしたいということで、町民の皆様の声、できる限り静岡市に聞いていただきたいということで、町長として私もできる限り頑張って、静岡市長に対しお願いをしてきたところでございます。

そうした中で、静岡市側からそれらを汲んでいただきまして、私としては、この合併協議会、既に9回は終了しておりますけれども、それなりの成果を得た合併協議会であったと、私は思っているところであります。町民の皆様にお諮りをして合併協議会を設置した、その経緯を申しますと、私としては、その合併協議会をすり合わせた結果を、町民の皆様にもう一度お示しをし、町民の皆様判断をしていただくという形で、今その手続に入っているところであります。

いずれにいたしましても、議会の議決を得て初めて住民投票ということができるようでありますけれども、お隣の蒲原町とはその合併協議会の設置の経緯が違ふこともありまして、その辺については御理解を賜りたいと思っております。議会制民主主義の原理からいきますと、町民の代表であります議員の皆様、そうした判断をしていただくことは当然のことではありますが、私が今申し上げましたとおり、町長の発議によります住民投票を実施させていただくこと、これは議会の臨時会の中で議決を得て初めて実施できるわけではありますが、私自身、もう少し頑張らせていただきたいと思っております。

ります。

毎日毎日、真剣勝負でこの問題に取り組んでおります。本日は、住民の代表であります皆様方から、それぞれの意見をお伺いするわけでありませうけれども、ぜひ町民の皆様方も参考にいたしまして、それらを踏まえた皆様方の真剣なる御判断を、また後日いただきたいと、このように思っているところであります。

本日のこの発表会が有意義に終了いたしますことを心から祈念いたしまして、御挨拶とさせていただきます。本日は御苦労さまでございます。

【意見発表者紹介】

司会 本日は、この由比会場におきましては6名の皆様に発表をお願いしております。本日発表をお願いした皆様につきましては、平成16年11月1日から19日までの間に実施いたしました意見発表者募集に応募された皆様であります。発表される方につきましては、受付で渡しました資料にありますので、また御覧をいただきたいと思います。

【意見発表】

司会 それでは、早速発表に入らせていただきます。本日の発表につきましては、お1人様10分以内で発表していただきますので、よろしく申し上げます。なお、10分を経過したらベルを鳴らし、発表者にお知らせすることになっておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひいます。

それでは発表に入らせていただきます。

最初に、由比町の望月達也様、お願ひいたします。

望月達也様 北田に住んでおります望月でございます。

私は、浜松にあります静岡文化芸術大学で教員をしております。本日は、教員という立場ではなくて、一サラリーマンとして意見を述べたいと思ひいます。この協議会にあまりサラリーマンの声が届かない、組合に入っていないわけですから。そういう一サラリーマンとして、この町に住んでどういうことを考えて、そして浜松までどうやって毎日通勤しているのかと、その辺のことを皆様方に御理解していただきたいと思ひいます。

私の話す内容は非常にシンプルです。なぜ合併が必要なのか。私は、その必要性についてだけ意見を述べさせていただきたいと思ひいます。そして皆様方には、その合併の理由、なぜ

合併しなければならないのか、その理由を、まず御理解していただきたいと考えております。

まず、私たちの生活を、皆さんと一緒に考えてみましょう。多くのサラリーマン、それから高校生は、毎朝、由比駅から静岡方面に向かって通勤、通学しています。その数は、約2,500人から3,000人の方が毎朝由比駅から出ている。この人たちは、私も含めて、昼間は町の外で生活しているわけです。

そうしますと、その多くの人たちが、実は静岡市のほうに通勤通学している。由比町の世帯数は、去年の12月現在で約3,000弱、正確には2,964世帯、つまり1世帯に1人の割合で、そういう人がいるということです。因みに皆さんとか皆さんの御子弟の中に、静岡市立高校とか、市立商業、それから清水商業を御卒業された方もおられるし、在学している人もいます。この3つの高校は、実は静岡市が運営している学校です。

由比町には当然のことながら高校はありません。「まちづくりは人づくり」という、よく言葉を耳にするとと思います。町をつくるには、人間をつくらなければいけないと。そういう言葉はよく耳にするのですけれども、由比町は長い間、高校教育というのは静岡県と静岡市に実は頼ってきたのが現状です。

そういう教育の話の本日はしなくても、実際に我々の生活の中に、例えば本日は日曜日、きのうは土曜日です。土曜、日曜、私たちは例えば買い物に行くときに、日用品を買いに、例えばジャンボ・エンチョーに行く。それからジャスコに行ったりしています。たまには静岡の駅前のデパートに行ってショッピングをしたり、それからレストランで食事をする。例えば映画を見に行くのなら、清水のドリームプラザに行くということ。私たちの消費を含んだ生活というのは、もう既に由比町というこの枠の外で動いているわけです。このことが、もう皆さんも生活しているわけですから、私の言っていることは特別なことではなくて、実生活の中で御理解できると思います。

生活圏が行政のエリアを越えているということはどういうことかということ、私たちの消費活動、物を買ったり売ったりする消費活動、もっと大きく言うと地域経済、地域ビジネスが従来と比べて変革が起こっているということになるわけです。

例えば具体的に言えばどういうことか。かつて由比町には、例えばナショナルのお店とか日立のお店とか小さな何とかのお店という電気製品を売るお店がたくさんありました。今はどうでしょう。由比町の中を、見てください。多くの方が、電気製品を買いにどこへ行きますか。家電の量販店です。これはもう事実ですね、皆さん。

では、なぜ量販店へ行くのでしょうか。量販店は、もちろん由比にもありますけれども、

由比町外の量販店へ行くこともあると思います。理由は簡単です。安いからです。でも、安いからといっても、そこまで行くのに時間がかかったら行けません。皆さん車を持っています。したがって、車があるということは、私たちの行動範囲は、自分の自家用車によって、清水も静岡も、由比とあんまり違わないと。つまり、どういうことかということ、由比町の中で買い物をしている感覚と全く同じ感覚で清水へ行って買い物するし、静岡へ行って買い物をします。

つまり、私たちの生活の中では、由比町とか静岡市という具体的なその行政の枠を意識して自分たちは生活しているかということ、実はもう既にそうではないのだと。つまり、自分たちが消費活動している、例えば娯楽で遊ぶところを考えると、実はもう既に静岡の経済圏の中できっちりやっているのだということ、これは皆さん御理解できると思います。

では、このことが由比町とか蒲原町の特有の話かということ、実はそうではありません。浜松市を考えてください。皆さんにしてみると、浜松は非常に遠くの、由比から西へ100キロも遠くの話のように思うかもしれないけれども、実は浜松市は、周辺の12市町村と今度合併し、新しい浜松市ができます。浜松市というのは、非常に財政力が強いので、そういう財政力の強いところから、龍山村のように非常に財政力の弱いところまでが一緒になって合併するわけです。これはなぜかということ、やはり生活エリアが同じだからです。それから、労働の雇用エリア、つまり働きに行く場所、これも同じ。経済エリアはもちろん同じ。それから高校の学区、こういうことを考えたときに、やはり同じエリアの中にいるということ。そういうことが合併を実現させていく源になっています。

では、これまで行政の合併は、歴史的にどうなってきたのかという話です。これは少し調べてみますと、江戸時代の自然発生的な町村を受け継いだ日本の町村の数が、明治21年、7万1,314あったそうです。それが明治の時代に、これではいけないということで、新政府になって、もっともっと国家をつくるのだということで、明治22年に1万5,820、これは一律町村合併ということで、国が断行してやったそうです。

その後行われたのが昭和の時代です。この昭和の時代は、昭和28年10月に9,860あった市町村が、最終的には3,472になったと。このときの話調べてみると、どのようにやったのかということ、新制中学を合理的に運営できる人口規模を8,000人と想定し、全国一律の町村合併を、国と県を中心に推進した。住民の意向が入り込む余地はありませんでした。

由比町はどうなってきたのかということ、皆さんも御存じのとおり、由比町は宿場町から始まっているわけです。隣接等の市町村も、今の話から行くと、直接大きな変革がないまま現

在に来てしまったということがわかるわけです。

では、昭和30年とは、どんな時代だったか。多分ここに住んでいる方、私も含めてわかるのは、テレビのない時代。自動車も非常に高価なもので、一般の人が乗るものではなかったわけです。したがって、多くの住民の方は自転車か徒歩。それで、乗合バスで移動する。したがって、消費は町内で大体考えられてくる。つまり、経済活動が町内で円滑に回っていたわけです。

ところが、50年経過してどうなったか。行政のエリアは変わらない。でも私たちの生活エリアは、私のように100キロ先まで通勤することができる時代になった。行政は変わらなくても、私たちの生活は、鉄道的高速化とか自家用車とか新幹線とか携帯電話、情報ネットワーク、インターネットと、次から次へ新しい技術とか情報を取り入れて豊かになっているのですけれども、何が変わらなかったかということ、行政のエリアは変わらないということです。

では、そのどこが問題なのかということ、行政エリアが、例えば生活エリアを包含しているとき、つまり、行政エリアが広い場合には、これは経済がその中で回っているから問題ないのだけれども、今のように反対になってしまうと、経済が循環しなくなってしまう。経済が循環しなくなってくるとどうということが起こるかということ、商店も大変になる。それから、個人消費も町の外で行われるから、町になかなかお金が入ってこないということで、財政的にも非常に苦しくなるということが起こるわけですね。そういうことを、実は皆さんに御理解していただきたいというわけです。

ここまでの話で、大体自分たちの生活エリアと行政エリアの関係というのが、多分直感的にも、皆さんは御理解できたと思います。

少し最後にお聞きしたいのですけれども、昨年12月1日現在で由比町の人口が何人か、皆さん御存じですか。1万40人です。いいですか。1万40人。この数は、毎月増えていると思いますか。減っていると思いますか。この数は減っています。多分このペースでいくと、今年の秋には1万人を割ってしまいます。

一方、ジュビロ磐田で有名な磐田市と合併する豊岡村、この村は1万1,526人。由比町より多いです。でも村です。いいですか。このことをよく考えてください。我々はもしかしたら、今年中に1万人割るかもしれないというところに住んでいて、それで町だ町だと言っている、人口規模が、周りから見たら豊岡村と変わらないではないか。それが現実なのです、皆さん。

では、最後に、我々が静岡市さんと一緒になって政令都市を目指す。そうしたときに、政

令都市としてどういう方向を目指すのかといったときに、1つは、やはり先ほど市長さんからお話があった、競争力のある地方都市、つまり仙台とかさいたまとか千葉とか、そういうような競争力のある都市づくりの一員として、とにかく我々が一緒になって、新しい雇用の促進、自分たちの子どもや孫がここに住んで勤める。そういうことがしっかりと円滑に経済圏として回るようなことをしていかなければならない。

我々は、せっかく合併協議がここまで来たときに、この合併直後の問題だけを議論するのではなくて、50年という長いスパンで考えていただきたい。今度、合併の議論が起こるのは50年後ぐらい先までないわけですから、しっかりと自分たちの子どもとか孫の代にしっかりと受け継げる、そういう合併を今考えなければいけない。これが私の公述要旨です。

司会 どうもありがとうございました。

それでは続きまして、静岡市の磯谷千代美様にお願いいたします。

磯谷千代美様 皆様こんにちは。御紹介いただきました磯谷と申します。

私は静岡市民として、あわせて旧清水市の市民として、蒲原町、由比町との合併について意見を述べさせていただきます。

合併に対する立場は、発表者名簿にありますように、その他です。つまり、自分自身の意見が固まってないということです。それなのに、ここによく出てくると思われるかもしれませんが、そのことも含めて話したいと思います。

私は、今回の由比町、蒲原町との合併協議会もすべて傍聴してきましたし、静清合併協議会も、たった1回だけ急遽設定されたものに傍聴できなかったのですが、それ以外はすべて傍聴してきました。

その中で、旧清水市民の立場で、「わたしもひとこと・合併通信」というミニコミ誌を出しながら、いろいろな合併問題について勉強してきました。そして今、この合併について、静岡の市民としての意見を、自分自身の意見を、まだ結論を出すことができない状態です。

この合併について、由比町、蒲原町の皆さんにとっては、どういう将来が予測されるでしょうか。私は、旧清水市民として、この由比会場の皆さんに今の清水の現状を伝えることができる機会があったということを楽しんでいます。

静清合併協議会から間もなく2年が過ぎようとしております。私は、今年の春、「私もひとこと・合併通信」で、旧清水市民を対象に、合併の実態影響調査のアンケート活動を行い

ました。その中で、旧清水市民のほとんどが合併に不満を持っているという結果が寄せられました。割合というよりも内容で考えてみたのですけれども、本当に様々な影響が、今、清水の中で現れています。

そこから考えるのですが、合併は、第一に、あくまでも行政と行政、自治体と自治体の合併だということです。ですから、行政が一つになれば、仕事、職員の方の仕事は、やり方が一つになっていきますから、旧清水の職員は、大きいほうに合わせるということで、大方の仕事が静岡のやり方に合わせられ、中核市の仕事を覚え、政令市の準備をするということで、とても大変だったように見受けられました。

それで、市民の側でどうかといいますと、行政に関わりが深いところから影響が出ました。特に行政の仕事を受けていた業者の方たちは、仕事がなくなると、あちこちで悲鳴を上げています。合併の影響だけではなく、この不況による影響ということもありますが、大きな企業をはじめ、幾つもの会社が倒産しました。その影響も大きいです。土建屋さんとか建築業界だけではなくて、印刷屋さんとか文房具屋さんとか、あらゆる業界に響いていきます。

もちろん、市民にとっては税金ですから、安いほうに決定するのは当然のことだと思います。そして、静岡のほうがまちも大きく、企業規模の大きいところもありますから、コストも安く、静岡の業者さんが取るのは当然かもしれません。ただ、長い目で見て、清水に住む私としては、地元の事業者の仕事が回らない中で、清水の地域経済の地盤沈下、あるいは、それは事業者やそこに働く人ばかりではなくて、地域の活性化やまちづくりにも影響が出てくるのではないかという心配を持っております。

次に、自治会や社協など地域で活動する団体やそのほかの民間団体も、業務の委託や補助金などの兼ね合いで、その多くが団体として合併したり、あるいは活動の中で調整せざるを得ない、静岡の方式に合わせざるを得ないということが出てきています。私は、それぞれのまちづくり、静岡も清水も、歴史的な経過もあり、そのまちに合ったまちづくりをしてきたのだと思います。ですから、静岡のやり方が悪いとか、そういう言い方をしたいわけではありませんが、清水は、各町内会、自治会単位でまちづくりをやってきました。そういう中で、地域の公民館も位置づけられていました。しかし、条例はまだ変わっておりませんが、実際の公民館の運営は、今大きく変わりつつあります。そのことが清水で地域活動をやっている人たちの中で大きな不安になっています。それは子ども会でもPTAでも同じように感じております。

また、市民サービスはだんだん遅れて変わってくるわけですが、まだ水道料などの

すり合わせも済んでいないので、大きな影響というほどではないと思います。ただ、実際にそういう事業者や地域活動をやっている方たち以外の一般市民のところでも、隣町なのに、何でこんなに制度や仕組みが違うのだらうと思うことが、日々の生活の中で、すり合わせが進められると、本当に実感をしております。そして、特にそういう活動をしている市民は、静岡市役所まで行かなければならないということは、少々距離感を感じているところでもあります。

また、こうした旧清水の現状と合わせて忘れてはならないのは、静清合併協議会が決めた新市建設計画です。合併協定書に盛り込まれたこの計画は、宮城島副市長が辞任されるときに、マスコミの記者会見で、法的根拠がなかったことを後で知ったと述べられたようです。何を決めたにしても、決めるのはその後の新市の市長や議会です。今、建設計画を見てみましたら、15年度から17年度で完成予定だった危機管理センターを含む市庁舎や、あるいはオペラハウス、わんぱくドーム、スノーボード場、どれもまだ手がつけられていないように見受けられます。私は、箱物建設に反対でしたので、できないほうがいいと実は思っているのですけれども、でも、そういうものをつくるという見通し、財政見通しも含めて策定した建設計画は、あまりにも稚拙だったと言わざるを得ません。そういう見通しのなさが、今、旧清水市民にとって不満となっているのではないのでしょうか。

ですから、私が皆さんに言いたいのは、今、蒲原町、由比町との合併でどのような絵が描かれようと、こういう清水の実際をみる中で、すべては合併後に変わるという事実です。地域自治区でも何でもなくて、決めるのは市長と静岡市議会です。そのことをよく考えてみたほうがいいのではないかと思います、

国は、三位一体改革で、地方の交付金、補助金をどんどん減らしております。ですから、小さな町が単独で生き残るのは地獄だと思います。でも、吸収合併で事業所さんが大変になったり、いろいろなサービスが、大きなまちでやられているサービスに合わせられていることは、それも大変な苦勞な道だと思います。

先日、蒲原町、由比町との合併協議会を傍聴してありましたら、こんな声が聞こえました。蒲原総合病院の累積欠損金について、何年度からの欠損金を10年計画で返していくかというような話のときに、後ろのほうで傍聴されている方が、「どうせ静岡市が払ってくれるのだから、何年度からだっていいじゃないか。町長、そんなに細かいこと言うなよな。」みたいな声が聞こえてきました。

私はそういう、大きなまちに寄りかかった考え方では、合併しても決して良い地域はでき

ないと思います。合併するのも大変、しなくても地獄かもしれません。でもそうだとしたら、自らの手で、誇りある地域をつくっていくほうがよいのではないかと、私は思います。

それで、静岡の市民として考えますと、少し考え込んでしまいます。この建設計画を見させてもらっています。何しろ編入合併ということで静岡市民にとっては住民サービスは変わらないわけです。ですから、静岡の市民、旧清水の市民も、はっきり言って全然関心がありません。静清合併協議会するとき、あれほど清水からたくさんの方が傍聴に行ったのに、今はどうして誰も来ないの、というのが現実です。

そういう中で、市全体で考えると、財政は今回の合併に伴う特例債の借金を背負うことになり、もし由比町、蒲原町の住民サービスを上げるために、税収以上にお金を出すことが必要だとしたら、それは静岡市の税金から出されるわけです。だから合併するなと言いたくないのですが、そういう影響とあわせて、では由比町、蒲原町が静岡と一緒にになったとき、静岡のまちがどのように変わっていくのかということが、今のところ示されていない。私としては、税金からそれなりのお金を出すのに、この静岡市が、どのように2つの町と合併することで変わっていくのか、そのことが示されない限り、静岡市民としては賛成も反対もできないと思っております。

時間を超過してしまいましたが、私も静岡市民として自分なりに判断の考えを早く出せるよう、そうした情報が提示されることを望んでおります。以上です。

司会 どうもありがとうございました。

続きまして、由比町の吉岡 清様をお願いいたします。

吉岡 清様 まず最初に一言言わせていただきます。

この合併協議会の設置に当たり、住民投票を行いました。賛成票の内訳には、合併するかどうかは別として話し合いをしてもらいたいというものと、由比は破綻するという宣伝に不安をかられて賛成に投票した人もいるということを考えていただきたいと思います。

そして先日、3,344人の合併反対の署名をいただきました。この署名は、短期間で、すべての有権者をくまなく回らなかったこと、そして、町の公務員や、それに準ずる人たちには署名してもらわなかったが、このような多くの署名をいただいたことを重く受け止めていただきたいと思います。この反対の3,344人の署名を背に、意見を言わせていただきます。

旧静岡市と旧清水市が合併してから約2年足らず経ちます。私は仕事上、毎日、旧清水市

へ行っております。そこで清水の人たちに聞いてみると、「対等合併のはずが吸収合併のようだ。」「あらゆることが旧静岡市に合わせられて、清水の特性が活かされていない。」「清水総合事務所は窓口業務だけで、対応も悪化し、主な業務のほとんどが本庁静岡市へ行かなければならない。」旧清水市役所に出入りしていたほとんどの事業者は、仕事が取れなくて廃業したケースもあります。宅地並み課税は、農家の反対を恐れて、合併協議の場では出さず、合併後に出されたなどの話を聞きました。そして、清水の人たちは口を揃えて、「今のところ良いことがなかった、由比は合併するな。」と言われました。

静岡市は、今年4月に政令指定都市に移行することで一層都市化に向かっております。一方、由比町は、農業と漁業を生活基盤とする田舎の町です。このように静岡市と由比町では、生活基盤、考え方など大きな違いがあり、この合併は不釣り合いだと思います。

地形を考えてみますと、さった峠がネックになっていると思います。いつ起こっても不思議でないと言われる東海地震が起こった場合、交通、通信等が遮断され、由比は孤立します。新潟中越地震の場合、地元を知り尽くした各市町村長は即リーダーシップをとり、災害に対処しておりました。由比が静岡市と合併した場合、由比の役場が出張所となり、受付業務しかできません。一刻も早い災害対策も後手後手に回り、より災害を大きくすると思われる。これは命にかかわる大きな問題です。

このようなときでも、蒲原病院の存在は非常に大きいと思われます。地域医療の拠点としても重要な存在であると思えます。国の財政も750兆円の負債を抱え、崩壊寸前と言われており、負債を補うために増税をしようとしております。一方、静岡市の15年度一般会計で経常収支比率は81.7%です。一般に80%以上は要注意と言われております。因みに由比町は74.5%、蒲原町は79.9%です。今年4月に政令指定都市に移行し、1,485件の業務が移譲されます。この業務の事業費が260億円と言われております。しかし、国や県から振り込まれる財源では80億円足りないと言われてます。これは人件費等の削減や借金、増税に頼るほかはないと思われます。

このように、静岡市も政令都市の移行により財政がますます悪化し、サービスは低下します。由比の住民が市長にあれこれと言って要望しておりますが、市長も、70万人を抱える偉い方です。たかが1万人の要望など簡単に受け入れるとは思いません。気持ちがあればやってあげようというやさしい答えです。旧清水市との合併の際、建設計画はたくさんありましたが、しかし、いまだに未着手の事業もたくさんあります。特に政令都市のシンボルである庁舎は、財政の関係で当初の3年は見送りになりました。宮城島元副市長がやめられるとき

に、合併協議で締結した新市建設計画について、法的な拘束力はないと後でわかったと言っておられました。この発言からも、由比の住民の要望など実現の可能性が低いと思われます。

人口は全国的に減少傾向にあります。静岡市も、このままいくと統計学上、10年後には70万人を割るでしょう。由比との合併で欲しいのは、人口1万人ではないでしょうか。

静岡市と合併すると、当然、公共料金、税金は上がります。特に農地の宅地並み課税は、法律上逃れることができません。由比の役場は出張所になり、主なことは静岡市本庁へ行かなければなりません。高齢者や弱者にとっては大変困ります。

漁業関係も、静岡市の漁協となり、港の整備など当然用宗港が優先されます。桜えびも、由比の桜えびが静岡の桜えびになります。現在でも静岡の業者が桜えびを扱っております。市場が静岡市となれば、直接参入してくるのは間違いありません。地元の仕事も、どんどん静岡の業者が入ってきます。由比町の財政が苦しいからといって、由比のすべてを静岡へ差し上げ、この見返りに何も来ないとしたら心配です。清水区の自治区では、私たち由比町民の意見が反映されないでしょう。

既に高齢化社会に突入しています。政府は、年金などの支給を減らして増税をしようとしています。この上静岡市と合併してまた増税では、私たちは生きていけません。私たちは箱物は要りません。どうせ負担するなら、100%由比町のために使っていただきたい。由比町には広重美術館、桜えび、みかんという軸があります。我々町民はみんなで知恵を出し、協力し、由比の伝統と文化を守っていこうではありませんか。

昔から、向こう三軒両隣という言葉があるように、田舎には田舎の良さがあります。静岡市は、政令指定都市としてまだ完成されておられません。由比は、このまま合併するのは自殺行為だと思います。単独の道を歩みながら、今後の方向を模索していったほうがよいと思います。よって、静岡市との合併は反対します。

司会 ありがとうございます。

それでは続きまして、静岡市の守屋秀子様に発表していただきます。守屋様、よろしくお願ひします。

守屋秀子様 皆さん、こんにちは。静岡市の守屋秀子でございます。

私は、合併のこと語るときに、いつもベルリンの壁のことを思い出します。1989年11月、東西ドイツの国境にありましたベルリンの壁が崩壊しまして、そのニュースは世界中を駆け

めぐりました。私は、そのときの感動を15年経った今でも忘れることはできません。ボーダレス社会の幕開けでありました。

今日、私たちの生活圏は、自動車を中心とする交通機関の発達やIT革命によって、住民の生活圏は、自治体の区域を超えて広域化しております。最初の方の御意見にもありましたけれども、まさにボーダレスとなりました。しかし、自治体の区域が昔のままなので、通勤、通学先やショッピングセンターの近くに役場やサービスコーナーがあっても、そこで用件を済ませることができない場合があります。このような不便な状態を解消するためにも、住民の生活圏に自治体の区域を合わせることが必要だと考えます。各市町村の合併問題も、このような時代背景のもとに浮上してきたものと思われま

実際、静岡市と蒲原町、由比町との間では、毎日多くの住民が行き来しております。私たちも、新鮮な桜えびを食べに由比に来たり、逆に由比、蒲原の皆さんに静岡へ来ていただいて交流をしたりしております。では、普段どれくらいの人たちが行き来しているのか、通勤、通学等による人の動きを、私は資料で見ってみました。約3,100人の住民が毎日、静岡市と蒲原町を行き来しており、約2,100人の住民が毎日静岡市と由比町を行き来していることがわかります。このことから、生活圏は既に一体となっており、合併は自然の成り行きと言えると思います。

そこで、由比、蒲原と静岡市との合併の必要性やメリットについて、私なりに具体的に考えてみました。

1点目として、これからは都市間競争が非常に厳しくなってきますし、第一に行政サービスの向上が必要です。さきに述べたように、私たちの生活圏は既に一体化しておりますので、これまでの地域に残されている行政の境界線を取り除き、生活圏と行政サービスの提供ができる範囲を合わせることが住民サービスの向上につながると考えられます。

2点目として、静岡市は、今年4月1日に政令指定都市になりますが、政令指定都市になると県から権限が移譲され、現在の都市制度の中で最大の財政力を持つことになると伺っております。それにより、市民は効率的な行政サービスが受けられるようになりますし、合併後の財政的な不安も解消され、文化的発展や交通機関の発達も期待できると思います。このようなことは、それぞれの町の発展につながることはないでしょうか。

3点目として、新庁舎建設予定地となっております東静岡地区は、合併後の新市のほぼ中央にあたりますので、そこを核として広域的視点に立った新しいまちづくりが可能になり、由比、蒲原等への波及効果も大きいと考えられます。

4点目として、合併した場合に、由比、蒲原が静岡市の端になってしまうという不安はあるかもしれませんが、東京に一番近いところですから、やがては静岡市の東の表玄関として重要な役割を担うようになるのではないのでしょうか。

5点目として、静岡市は広域合併によって、日本のほぼ中央にある大都市圏となり、陸海空の交通手段や情報網を使って、アジアの中の静岡として全国に、また世界にアピールできるでしょう。その要素は十分に持っていると思います。

1つとして、用宗から由比、蒲原までの海岸線は観光資源が豊富であり、静岡の観光ルートとしてアピールしたいと思います。しらす漁で有名な用宗漁港、桜えび漁で知られる由比漁港と、世界貿易港の1つと言われる清水港とをあわせて、もっともっと全国に、いや、世界に向けて情報発信できるでしょう。観光産業が盛んになれば、経済効果も得られるし、交流人口が増えれば、そこに賑わいが生まれ、町全体の活性化につながると思います。人の集まる、賑わいのあるまちづくりが可能になると思います。

2つとして、先日私が仲間たちと由比、蒲原へ出かけまして、東海道広重美術館まで散策したり、あかりの博物館などを見学してきたばかりですが、旧東海道宿場町としての歴史的、文化的な遺産である街並みや博物館等を、静岡の丸子とともにアピールしたいと思います。

以上のように、合併による双方のメリットはたくさんあります。私は日頃いろいろな団体活動をしておりますが、1つの力は小さくても、集まれば大きな力になるという認識のもとに、他団体とネットワークをして活動をさらに広げております。そうすることによって相乗効果が得られ、団体が活性化されるからであります。合併についても同じことが言えるのではないのでしょうか。

なお、これからのまちづくりは、単に行政任せではなく、市民と議会と行政が一体となって推進していくべきことだと、私は常々考えておりますが、何事もチャンスとタイミングが成功の鍵を握ると言われます。合併の気運が盛り上がっている今こそ合併のチャンスであり、グッドタイミングではないのでしょうか。由比町、そして蒲原町の皆さん、ぜひ合併いたしましょう。

以上で私の意見を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。

それでは続きまして、由比町の青木由紀子様にご発表していただきます。それではよろしくお願いたします。

青木由紀子様 私は、清水市と静岡市が合併して、閑散とした市役所がある清水に仕事で通っております。私は合併に反対で、これから私の意見を述べさせていただきます。不慣れですので読んで終わるといことになるかもしれませんが、よろしくお願いします。

私は、町の都市計画審議会の委員、一応肩書きは学識経験者となっておりますけれども、それと町政モニターを現在させていただいております。中央公民館ができたときも、4年前までボランティアをさせていただきました。町とも深くかかわってきたつもりであります。

そのような中、この合併について反対、またはわからない、どうなるだろうと不安に思う方々と多く接しました。合併しなくてはならないと思ったこともないとは言えませんが、合併特例債、臨時財政対策債、交付税、基準財政需要額、国民健康保険税、建設計画、過去に合併した市町村の財政等も調査して、合併反対の意思が加速していき、固まりました。

まず、なぜ交付税は減らされたのか。もちろん国の財政が大変であることは言うまでもありませんが、平成13年から18年の間、臨時的措置で交付税の一部が臨時財政対策債に振り替えられたことです。借入れには違いないのですが、元利償還金は交付税となる基準財政需要額に算入されます。ですから、実際は減らされているわけではないということがわかりました。むしろ交付税の見直しをするきっかけは、このような内容にあったのではないかと思います。

昨年11月4日の読売新聞の内容です。財務省が調べたところ、7から8兆円もの交付税が地方公務員給与や結婚祝い金、50万円の海外旅行奨励金、特に5万円の結婚仲介報償金等使い回しをしていた地方自治体がありました。財務省が交付税削減を主張してきたということは、それがすべてではありませんが、そのあたりが1つの要因でもあり、それでは大変だとなったようです。事実、私が知っている方、元市役所の職員ですけれども、前は出張先で、コンパニオンを呼び豪遊していたという話を聞きました。そのようなツケが一般市町村民に降りかかってきたのではたまりません。私たちの大事な税金です。

次も税金のことです。市街化区域の農地の宅地並み課税、これは農家ばかりの問題ではないのです。一般の宅地も、合併すると都市計画税がかかってくるので、負担増になると思います。町では、合併しないと固定資産税もどのくらいになるかわからないと回答しています。今、町内の固定資産税の評価は路線価方式ではないからです。固定資産税が上がると、国民健康保険税の値上がりにも結びつきます。なぜならば、所得割と資産割があるからです。今、国保税を払っていない方も、会社を退職されれば当然納めるようになります。合併の反対者

は、市の中心部は栄え、末端の由比まで恩恵がないならば、合併せず、税金等はこの町に落とし、この町で使いたいということです。

昨年12月9日、静岡新聞に由比町の財政予測として出された試算に、「義務的経費すら賄えず」と大きく出ました。義務的経費というのは、人件費、扶助費、公債費。公債費というのは借金の返済です。この3項目で、平成22年歳入は22億5,500万円で、義務的経費の10億6,500万円は十分賄えます。住民の不安をかき立てる見出しだと思いました。しかし財政は確かに大変です。財政予測を見ますと、人件費は毎年400万円の減です。1人退職されても、そのぐらいの数字は軽く減ります。自然減と言うべき数字です。この数字では、まだ行政改革がなされていません。

次に地域自治区の問題で、10年は認めていただけるようですが、川瀬憲子静大助教授のレジュメを見ますと、昭和の大合併の際に合併した市町村は財政援助を58%に圧縮されて、約束を果たしてもらえず、住民の負担は増税、公共料金の引上げと起債によって増大したそうです。さらに合併直後はいいのですが、合併して10年、20年後には、都市の中心部から外れたところはさびれる一方です。10年の自治区では、見守っていくことはできません。区以上の権限はない。しかも、東京23区のような特別区ではなく、区議会も開かれないうことでは、地域自治区に何の意味があるでしょう。

次に建設計画です。新静岡市の建設計画は5,528億5,000万円と聞きます。合併特例債は、主に箱物と基金にしか使えません。そのうち30%は借金として返済していかなければならないものです。箱物をつくり、交付税も減らされたときから返済が始まり、箱物の管理費用も発生してきますので、ここからが大変ということです。その筋の学者等が指摘しています。合併賛成のチラシに、宅地並み課税について猶予期間、軽減期間の間に支援策を訴えまじょうと載っていますが、一度決められたことを変えることは大変で、できないと考えるほうが妥当だと思います。

市街化調整区域のことにしても、一旦指定されたら、戻らないと思ったほうがよいと思います。旧清水市の都市計画の線引きのときに指定された住民は、今泣いています。その関係の先生から、「青木さん、庵原、大内の人々から事実を取材して、声を聞いたら」と助言を受けました。また、「本当に悲劇だから、由比は調整区域をつくってはだめだよ」とも、そう言ってくださいました。さらにチラシには、生産緑地指定を受ければ、従来どおりの課税のまま農業を続けることが可能になると載っていますが、由比町の農地は500㎡以上で条件に見合う農地がどれくらいあるでしょう。

実際にこのような仕事をされている方に実務的なことを尋ねてみてください。後で泣かないためにも。因みに私もそのような関係の仕事をしておりますので御相談を受けます。

その他、単独では、合併協で決定された建設計画にあるような投資的事業は一切不可能になると載っています。合併協で決定された建設計画には法的拘束力がないことを御存じですか。先ほどの方もおっしゃいましたが、宮城島元市長さんがそのような形でおっしゃいました。

最後に、自治体は財政が問題でなく、支出を抑制することが問題で、身の丈に合ったまちづくりが必要ではないか。小さくても住民の声が届きやすい自治体がいい。私は仕事柄、市役所、役場へ出向くことが多いです。勤務先でも、「由比町の職員の方は親切だよ。」と自慢しています。また、昨年出産した2人の娘も申しておりました。「役場の方がこんなに親切にしてくれるとは思わなかった。」と感激していました。私は、娘たちにすかさず、「この職員さんだけでないよ。みんないい人ばかりだから。」と申しました。自治体が大きければ、専門職の人材を置くことができると話された方がありましたが、専門的な知識も必要かもしれませんが、どちらかといえば温かい心で接する由比の職員の方をとりたいです。

ある葬儀で、喪主が「蒲原病院の看護婦さんが優しくて親切だった。蒲原病院をなくしてはいけない。」と話されました。私も亡くなった母の入院中に感じました。庵原郡には、都市にない有形無形の資産があります。それを失いたくありません。このほか、調整区域の既存宅地の件とか、いろいろと申し上げたいが、持ち時間が多分ないと思いますので、これで終わらせていただきますけれども、終わりに、県や静岡市の方には大変お世話になりまして、お礼を申し上げます。

以上で私の合併反対の意見を終わります。御清聴ありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。

それでは続きまして、由比町の笹間吉久様に発表していただきます。よろしく願いします。

笹間吉久様 賛成の立場から意見を発表させていただきます。

私も由比町に生まれ、これから由比町で骨を埋める者として、単独で豊かなまちづくりがし続けていかれるものであればそうしたいと、いまだに心の底では思っている一人です。しかし、まず大前提として、この平成の大合併は国家戦略、実際に国の借金財政克服、それが

ら加速度をつけて進みます。少子高齢化に伴う構造的な財政難、さらには、これから介護などの行政需要の増大という重い課題を同時に克服するという唯一の残された道だと国が判断し、その方向性を示したものと、好むと好まざるとにかかわらず、進むべき道を指針として出されておるといふこと、これをまず大前提といたしたいと思ひます。

そして、市町村の歳入不足を一段と深刻化させることが決定的になっております。三位一体改革の中で、由比町のように人口1万人を切ろうとしている小さな町が単独で行こうとした場合、先日、由比町が発表した財政予測にもありますように、住民サービス及び投資的事業を従来どおり実施した場合、かなりの差し引き不足額が生じます。つまりは、今後は住民サービスを大幅に低下させ、投資的事業はかなり縮小させるか、それとも町民負担を相当額増大させるかの、どちらかの選択をしなければならないという時代に突入しているといふことは自明の理です。

一般企業とは違ひまして、倒産こそないにせよ、単独でいった場合には、財政は必ずや行き詰まる。つまりは破綻となることは明らかです。前向きなまちづくり事業は絶対に必要なことです。しかし、到底望むべきもないといふことは必定です。確かに合併はバラ色の道ではありません。むしろ苦難の道かもしれませんが、しかし、それを乗り越えて活力ある未来へ向かい生き残りをかけて地域を守るといふ必要があるのではないかと思ひます。地域を支えてきた老人の方々の余生が、町の行政界、つまり境界で差別されてはなりません。そして、我々の次の世代がより幸せに暮らせるよう、私たちの手でよりよい地域をつくり上げ、子どもたちが生き生きと生活できるよう力を結集する重要な時期に来ていると思ひます。

幸いにも合併協議の中で、静岡市側は、自治権や生活権の各テーマにおいて、かなりの譲歩をしてくれています。私は、この小さな町に対し、誠意を示していただいていると受け取っております。

建設計画の中には、単独でいった場合でも、やはり長期のスパンで考えなくてはならないことが、ある程度建設計画の中に盛り込まれており、そしてそれに対し、地域自治区を認め、地域協議会を設置して、その建設計画の進捗状況もチェックできるというスタンスで臨んできております。建設計画につきましては、私たちにとっては、生活になくなくてはならないこと、そして夢を持つといふことができるような内容が含まれております。

合併特例法といふ国が決めた期限、これはやはり、どうにもなるものではないと思ひます。私たちが、確かにこの地域を誇りを持って守っていく、自立をしていくといふことができれば、私もそうしたい。しかし、もうこの国がどうすることもできない国策として決定したこ

とに対し、それを前提とせずすべてのことを考えていくというのは、これは地獄以外の何物でもないと考えます。ぜひこの合併特例法の期限に間に合う最後のチャンスを生かし、静岡市との合併を実現させるべきだと考えております。

実際に単独の道を選んだ地域は全国にかなり出てきておりますが、その方向性たるや、我々住民にとっては、想像すらできなかった、本当に厳しいものがいっぱい入っておりまして、そこまでしなければ生き残ることはできないのだろうかと思われることがたくさん出てきております。ぜひ、この最後のチャンスを生かすべきだと考えております。

それから、この合併によりまして興津地域、あるいは蒲原町との行政のボーダーがなくなります。私は、このことをぜひ訴えていきたい。この地域にとって大きな意味を持つことだと考えております。従来単独で交流人口増加を含めて地域の活力を生み出すために、町民の方々は一生懸命取り組んではいますが、限界があります。これから前向きに地域づくりを進めていくためには、この行政のボーダーは取り払っていただければ、さらに豊かなまちづくりが進められるのではないかと考えております。

この3地域は、どこも歴史的遺産や数多くの歴史的雰囲気が残されております。さらには、海の幸、山の幸が、大変豊富な地域でもありますし、連携によって、交流人口増加、あるいは非常に風光明媚なところとして知られておりまして、この3地域がボーダレスで連携していったならば、必ずやすばらしい地域ができ上がるものと信じております。

この合併は、単に行財政改革ばかりではなく、地域の連携による新たなまちづくりへのスタートでもあるのです。活力と夢のある地域へ変貌を遂げて、本当に静岡市の中でも、東の表玄関というぐらい、胸を張って言えるような地域に名乗りを上げるチャンスでもあるのです。ぜひともこの千載一遇の機会を逃さないでいただきたいと希望しております。

それから、先日の住民投票の件について、少し触れさせていただきます。現在、同意を見ております合併協議会も、御存じのように我々住民投票で設置が決まってまいりました。そして、ここまで9回にわたり合併協議会が行われ、全項目について合意がなされております。私たちは、この合併協議の中で、自分たちがどういう立場に置かれているかということきちっと認識し、情報提供していただいておりますので、関心を持って合併協議会を傍聴し、そして、その結果を受け止めて、そしてこの機会に、やはりこの由比町の運命を決する決定については、町民にさせていただきたいと願い出たものでございます。先日の私たちの住民投票条例制定請求に対しまして、望月町長は、短期間に決断し、自ら議会へ上程する意志を固めてくださったことに対し、心より感謝申し上げます。

大変失礼な言い方になるかもしれませんが、望月町長には、我々町民から負託を受けて政を行うことをお任せした以上、最大の使命は、地域や住民を正しい方向に導いてくださることだと信じております。この意味で、本当に由比町の運命を決するこの段階で、町長自らが住民に御自身の考えを真剣に訴え、住民投票になった場合には、合併協で発言なさっているとおり、賛成の立場で、強力なリーダーシップにより先頭に立って運動し、正しい結果を導き出すよう全力を挙げていただきたい。私たちは、そのために請求を取り下げたことをお忘れなきよう、特にお願い申し上げます。以上です。

【閉会】

司会 どうもありがとうございました。

以上をもちまして、6名の皆様からの意見発表がすべて終了いたしました。

本日は、発表者の皆様から貴重な御意見をいただき、誠にありがとうございました。本日皆様から寄せられました御意見等踏まえまして、合併協議会では、今後1月28日に合併の是非を行うこととしております。静庵地区の将来にとって重要な決断となります、この是非決定に向け、合併協議会としましては、全力を挙げて取り組んでまいりたいと思います。今後とも皆様の御理解、御協力をよろしくお願いいたします。

それでは以上をもちまして、本日の住民意見発表会を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。

蒲原会場

1 開催日時 平成17年1月16日(火)午後4時から5時30分まで

2 開催場所 蒲原町文化センター4階大会議室

- 3 次第 (1) 開 会
(2) 正副会長挨拶
(3) 意見発表者紹介
(4) 意見発表
(5) 閉 会

4 出席者 (1) 意見発表者(敬称略)

	氏 名	住 所	合併に対する立場
	朝原 邦夫	蒲原町	賛 成
	西野 泰行	静岡市	その他
	鷲 巢 裕子	蒲原町	賛 成
	森 美佐枝	静岡市	賛 成
	井上 博章	蒲原町	賛 成

(2) 静岡市・蒲原町合併協議会

小嶋会長、山崎副会長、

鈴木委員、剣持委員、濱崎委員、藤浪委員、杉山委員、

須藤委員、石川委員、池田委員、志田委員、吉田委員、

斉藤委員 (全13名出席)

5 発表会内容 以下のとおり

【開会】

司会 ただいまから、静岡市・蒲原町合併協議会及び静岡市・由比町合併協議会住民意見発表会を開催いたします。

本日はお忙しい中、静岡市・蒲原町合併協議会及び静岡市・由比町合併協議会主催により、まず住民意見発表会に御参加をいただき、誠にありがとうございます。

さて、合併協議会では今月28日に開催されます第10回合併協議会におきまして、合併の是非が決定されます。この是非決定に向けまして、住民の皆様の意向把握のため、静岡市、蒲原町及び由比町におきまして計6回の住民説明会を開催してまいりました。

本日の住民意見発表会は、住民説明会に加えまして、特に意見を希望される住民の皆様の発表の機会といたしまして開催するものであります。皆様の率直な御意見を拝聴したいと思いますので、よろしくをお願いします。

【正副会長挨拶】

司会 それでは意見発表会の開催に当たり、合併協議会の正副会長から御挨拶申し上げます。

まず静岡市・蒲原町合併協議会及び静岡市・由比町合併協議会の会長であります小嶋静岡市長から御挨拶申し上げます。

小嶋会長（静岡市長） 皆さん、こんにちは。両合併協議会の会長を務めております小嶋でございます。本日はお忙しい中、お集まりをいただきましてありがとうございます。

つい先ほど由比町でもこのような住民意見発表会を開催させていただきました。この合併協議会は昨年の4月に設置されまして、できるだけ住民の皆さんに参加をしていただく、そしてできるだけ情報公開をしようということで、これまで9回の協議会を重ねてまいりました。この後は1月28日に最後の合併協議会が行われまして、そこで合併協議会として合併が是か非かということを決めてまいります。是となればその後は各議会で最終的に合併をするかしないかの自主決定をするということでございまして、最終段階に入ってきております。

本日は、3自治体の合併協議会委員全員が参加しております。そして合併協議会の各委員が住民の皆さんの様々な御意見を生で聴いて、そして1月28日の合併の是非決定をするときの参考にしたいということで本日は開催しておりますので、そういう趣旨だということをもまず御理解をいただきたいと思います。

いずれにしましても、合併というのは自治体にとって最重要な問題でありまして、我々静岡・清水が合併して1年9か月が過ぎましたけれども、今いろいろな苦勞をしております。

しかし、この合併問題だけはやはり自分たちのまち、地域の将来を考えて、大所高所に立った判断がぜひ必要だと思えます。現在、静岡・清水が合併して、実はまだすり合わせをしているものも残っております。しかし、そういうものを一つ一つ乗り越えながら、実質的な一体化に向けて今取り組んでいるというところであります。

しかし、本日は皆さんに申し上げておきたいのは、現状、静岡・清水の合併は、先ほども申し上げたのでありますが、胸を張って言える4つメリットがあったと我々は自負しております。

1つ目は、両市が合併したことによりまして、管理部門が統合したその結果、2年間で2百数十人の職員の削減に成功いたしました。人件費にして約27億円の削減になるわけでありまして、これは市民の皆さんに現金でお返しするわけにはいきませんが、これが毎年住民福祉の向上に使われていることは間違いのないわけでありまして、これが1つの大きなメリットだと思えます。

2つ目は、もし静岡・清水が合併しないで別々の道を歩んでいけば、未来永劫、政令指定都市になることはできませんでした。それが両市の合併によって、政令指定都市になり、今まで県を通して行っていた事務事業が、今後は自分で判断してできるという、そういう都市になることができます。これはどこの都市でも望んでいるわけでありまして、これが成し遂げられたというのが2つ目の大きなメリットであります。

3つ目は、ごみの処理についてです。皆さんの地域でもごみの処理は大変悩んでおられると思えますが、静岡の合併後、今でも清水地区の住民の皆さんのごみの30%以上が静岡側で処理をされておりまして、それがまず清水地区の皆さんにとっては大きなメリットだと思えます。新たな焼却施設をつくらなくても済むわけでありまして。

4つ目のメリットについてですが、清水地区には興津川というところがありますが、ここが実は清水地区の皆さんの唯一の水道水源であったわけでありまして。ここが時々、水が足りなくなるわけでありまして、静岡地区は安倍川の豊富な伏流水に恵まれておりまして、あと2年ほど経ちますと、これを直接清水のほうへ給水するということが始まります。これによって興津川の水も恐らく復活をするでありましょうし、清水地区の皆さんの水の問題は一気に解決をするはずだと思っております。

しかし、これはどちらかが痛みを感じて得たメリットではありません。お互いに持っている力を出し合って、お互いの住民の福祉が向上するという結果を得たことでありまして、そういう点で言えば、我々は今現在、合併をしたことによるこの4つの大きなメリットについ

て、胸を張って、市民の皆さんに言えるのではないかと考えております。

細かいことを言えばきりがないわけではありますが、やはり大局的な見地に基づいたこの合併の議論というのは、やはりこれからの将来のために必要だろう。またそういう時期を我が国は全国的に迎えているということも事実だろうと思いますので、この際申し添えておきたいと思います。

最後に、我が静岡市としましては、今回両町から発議を受けまして、それをお受けして議論しているわけではありますが、静岡市側としましては、できるだけよい方向へ持っていきたい。両町の皆さんの意向を受けて、同じ圏域の仲間として一緒にやっていければよい、そういう気持ち大きいということも本日は最後にお伝えしておきたいと思います。

あと限られた期間、最後の決着の日が迫っておりますけれども、皆さんに大局に立った判断をぜひともしていただきたいということをお願いして、私の御挨拶に代えさせていただきます。よろしく申し上げます。

司会 次に、静岡市・蒲原町合併協議会副会長であります山崎蒲原町長から御挨拶申し上げます。

山崎副会長（蒲原町長） 皆様こんにちは。本日は、蒲原町の合併協議会の委員さんのみならず、静岡市の皆さん、それから由比町の合併協議会の皆さんも全員参加いたしまして、1月28日、合併協議会がいよいよ決定の時を迎えておりますものですから、それについて住民の皆様から直接御意見を伺おうという趣旨で開催したものでございます。

この開催に当たりましては、11月にこの意見発表の皆様方を町の広報等を通じて公募をさせていただきまして、そして御応募をいただいた5名の方々に本日は御発表をいただくことになってございます。ぜひその状況をまず踏まえていただけるとありがたいと思います。

それから、4月以降、既に9回にわたって合併協議会の協議を継続してきたわけですが、前回1月11日の協議会の中で、31項目にわたる全ての協議は実質的には既に終了をした形になっております。要は1月28日に事実上の採決をとるという段取りまで作業が進んでおるということもまた御報告として踏まえていただければありがたいと思っております。

私自身はこの合併というのは、第1の目的は行財政改革にあると思います。これはもう1回目の協議会の挨拶の中でも強調させていただいた点でございますが、いずれにしてもこれだけ高度な福祉を維持しなければいけない先進国日本の、今の行政の重みが、少し皆さんにとってお荷物になってないかと。ここのところから、まず合併はなぜ必要かという視点があったわけですが、いずれにいたしましても賛成の方、反対の方、それぞれの思いが

あることは私も承知しておるつもりでございます。

特にこの蒲原のような、本日もニューイヤー・ウォークというイベントをやらせていただきましたが、何とも言えない1つのイベントの中でも、住民の皆さんの温かい心のようなものがこもっているといいでしょうか、そういうまちづくりをずっと110何年かの間続けてきたつもりでございます。やはり私たち先輩が築いてきた、そうした温かいまちづくりの温度が下がってしまうのではないかという心配については、これは何とかしてそうした私たちの町の良いところを、この合併の中で少しでも静岡市さんに気づいていただけるとありがたいと思います。

私もそうした点については、最後の最後のいろいろな細かい項目のすり合わせにわたって想いが引き継がれること。何よりも形やお金のことだけではなくて、本当にそうした温かい蒲原の想いのようなものが引き継がれていく。最後まで全力を尽くす覚悟を持っております。

ぜひ皆様方も、本日の賛成、そして、本日のプログラムを見る限りでは反対という表現は出ておりませんが、ともかく皆様方の御意見をよく本日は聴いていただき、そして私たちの町が、また今までと同じように住みよくて温かい町を続けることができるようなことに向かって、一步一步着実に歩みを続けていきたいと思っております。

どうぞ皆様方の御理解をもう一度お願いを申し上げます。ありがとうございました。

【意見発表者紹介】

司会 本日、ここ蒲原会場では5人の皆様に発表をお願いしてあります。

本日意見発表をお願いする皆さんは、平成16年11月1日から19日までの間に実施いたしました意見発表募集に御応募いただいた皆様です。発表者の名簿は受付でお渡しした中に記載してありますので御覧ください。

【意見発表】

司会 それでは、早速、意見発表に入らせていただきます。本日の発表についてはお1人10分以内で発表していただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは蒲原町の朝原邦夫様、よろしくお願いいたします。

なお、委員の皆様のお手元には、朝原様の発表資料を置いてありますので、御覧いただきたいと思っております。

朝原邦夫様 私、蒲原町の朝原邦夫と申します。10分間という限られた時間ですので、過日、庵原新聞さんのほうに一部を記載していただいたのですが、本日の協議会の委員の皆様には私の発表資料を配付させていただいております。私は合併賛成の立場でお話をさせていただきます。

先ほど由比町の合併についての意見発表者の意見を聞いていまして、少し思うところがありました。反対の方ですけれども、静岡市と清水市の2年前の合併についてということで御意見された方がいらっしゃいました。私の考えといたしましては、合併についてあら探しとは言いませんけれども、やはり先ほど静岡の小嶋市長さんがおっしゃっていただいたように、合併というのは将来10年、20年、50年と長いビジョンで議論すべきであります。たかが2年のところでマイナスが出たと、これはある程度仕方ないと思います。我々住民もその痛みは乗り越えて、やはり将来の我々の子孫のために合併という論議を今しているのだという視点を、ぜひ我々も、おねだりという形ではなくて、住民という立場の責任者という立場で私は合併すべきだと考えております。

それでは、10分間という中ですので、ほとんど丸読みになってしまいます。よろしく願いします。

私は、合併に賛成です。

現在、蒲原町の生活圏は蒲原町を越えています。私も週3回東京に通学しております。蒲原町以外に勤務地、学校へ通うケース、静岡市、蒲原町への互いの交流人口についても、説明会の資料のとおり、かなりの数があります。今や蒲原町の行政の枠組みは生活圏と比べ過ぎます。遅れています。先ほどの由比の方もそう申しておりました。私も同感です。合併しても蒲原という地域は存在します。むしろこれから静岡市になることにより、地域の大事さ、自立心が私はかなり強くなると思います。

私自身は蒲原町役場に6年間在職して、蒲原町がいかに静岡市等の大規模な自治体と比較して、行政サービスの低さ、専門性に欠けるものであるか痛感しました。これは蒲原町役場職員の問題ではなく、行政の規模が狭いことによる弊害です。具体的には規模の大きい自治体と比べ、一人の公務員が複数の業務を兼任した結果、質と専門性が低下しています。

合併の反対の理由として、近くに役場があるから便利とか、住民の声が反映しやすいということは、役場の内部にいた人間の一人として、住民の過度の期待であります。むしろ近過ぎるということが原因で、ある特定の人に手厚く、そうでない人には優遇されていないとい

う私は不公平さがあると思いました。

私は商学部出身で、蒲原町役場に在職中、自治体も複式簿記の思考が必要と静岡新聞に掲載させていただきました。そして約20年を経て、行政も複式簿記の思考を導入し、貸借対照表を作成し始めました。合併反対の理由として、1人当たりの調達源泉であります借入金の額が静岡市より蒲原町のほうが少ないということが挙げられます。これは単式簿記の弊害です。つまり設備投資をどのくらいしているかという資産の運用状態の記載が開示されていません。調達源泉である借入金のみしか開示していない。これらは下水道整備等設備投資を何もしていない自治体のほうが有利になるという錯覚に陥ります。合併反対の方は財政状態という貸借対照表の理解がされていますか。

今後について、蒲原町は特に優良な財源収入がありません。将来的に高齢化と少子化による蒲原町の財政について、住民税の増税及び蒲原町職員、議員の給与無給等幾ら緊縮財政を行っても、福祉・教育等の行政需要には耐えられません。財政基盤のない蒲原町では、住民サービスの低下も危惧されます。

私は現在、税理士事務所を営みながら専門職大学院で会計学の勉強をしています。専門的立場で合併協議報告会資料での町財政の推移、蒲原町単独の財政計画を検討した場合、蒲原町の財政破綻が確実です。

確かに静岡市と蒲原町が合併しても、100点満点はないのは現実です。しかし私は70点でも合格だと思います。蒲原の地に桃源郷を求めてはいません。生活の場として、将来、より住みやすい環境を看板にすることを目標としています。広域行政という観点から、静岡市との編入合併が蒲原町の生き残る最良の道です。よりよい選択です。

合併について、性急に事を運ばず、十分な話し合いをしてから静岡市との合併という考えも私は反対です。これから蒲原町は財政という体力を消耗するわけで、そのときは静岡市との合併は静岡市から断られます。機会損失です。企業経営と自治体の経営も同じで、先見経営をやる早目の行動が肝要です。蒲原町の都合だけでは合併はできません。

英知を結集した協議会の委員の皆様には、この10回の協議会の時間は合併への十分条件があります。時間をかければ良い結果が出るものではありません。委員の皆さんには将来に関して先見力があります。時間軸より先見力が合併にとって重要です。あまりにも先の末梢的な事柄まで合併協議会の決議は必要ないのです。今問われています合併の方向づけ及び骨子を決議していただきたいのです。

また地域軸等について、区役所の権限を越えたら、合併ではそもそもなくなります。権限

の主張にも見識ある限度が必要です。町議会の中での一部の、無限大と思える権限の主張は、合併全体反対のための口実です。町民の民意を無視しています。その理由として、無限大の権限の主張は、どこまで権限の主張を行うかという政策の指針、いわゆるガイドラインというものを町民に明示していません。もっとも初めから合併反対という前提の無限大の権限の主張であれば、町民にガイドラインを示すことはできません。

合併後すべてがバラ色になると言うことも危険です。合併後私たちが住みよいまちづくりを負う責務があります。企業会計で言うところの継続企業の交流です。また、会計責任、アカウンタビリティと申し上げますが、それは我々住民にあります。もちろんリスクマネジメント、危機管理は、合併後絶対忘れてはいけません。合併反対の方は、会計責任という概念を理解されていますか。今まで何とかやっていけたから、合併後も何とかなるとか、霞を食べて生活できる幻の論理で合併反対を選ぶことはやめてください。もしも己の欲得、利権で合併反対するのでしたら、きりがありません。将来の住民に対して、合併で100点満点を取るつもりでしょうか。もしそうならば永遠に蒲原町の合併は無理です。ぜひ合併協議会委員の皆様、合併賛成をお願いします。

なお、蒲原町のお願いに対して、小嶋市長をはじめ静岡市側の寛大かつ丸のみに近い協議会のさまざまな今までの決議に感謝申し上げます。合併協議会の可決と議会の廃置分合の可決は不可分と考えるのが町民の自然の思いです。議員の皆様にもその過程の中で十分合併について審議されてきました。既に町民の過半数以上は合併を容認しているのは世論の事実です。議員の皆様、過日静岡新聞の記載のとおり、蒲原町は議会の所有物ではありません。町民の所有物です。静岡市議会の皆様、合併の採決をお願いします。蒲原町議会の皆様、合併の採決をお願いします。

最後に蒲原町議会議員の皆さん、合併後は蒲原町最後の議員として永久に名前が残ります。名誉が残ります。この蒲原地域において、歴史の英雄となります。合併の可決は議員の皆様の町民のための積極財産であり、英断です。

以上、意見発表を終わります。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

次に、静岡市の西野泰行様に発表をしていただきます。よろしく申し上げます。

西野泰行様 私は静岡合併してどうなったかを、旧静岡市側の私がどう感じたかの話をする

ために用宗からやってきました西野と申します。元清水の人が静岡と合併してどう感じたかという意見とあわせて判断材料の1つにしてください。

応募の理由は、インターネットの中にウェブサイトとかブログ（Blog）、BBS（電子掲示板）、ウィキ（Wiki）などのサービスがあって、匿名でバーチャルに書き込んでいるのを見えています。本来はその管理人やスレッドを立てた人が責任をとって、みんなの意見を代表してこの場で記録されるように発言するべきでしょうけれども、匿名性という利点がなくなってしまうわけです。ですから私は、直接利害関係がない私が、地元の小学生の意見や、進学して帰省できない人の意見も含めて代わりに言いたいと思いました。

既に読んでいる人もいるでしょうけれども、インターネットのきれいな人もいるし、検索に引っかかってこない意見もありますので、最後までお付き合いください。多数に向かって発言されていますので、それほどひどい意見はありません。今から読みます。

「素朴な感情としては、蒲原出身と言ってもわからないので恥ずかしいわけじゃないけれども、静岡のほうではなく、静岡市の外れだけどって言えるので、早く合併してほしい。コンクリートだらけで帰るつもりは持っていないからどっちでもいいけれども」と。多分これは小学生ではなくて中学生くらいの意見だと思うのですけれど。

次に出てきたのは、「このままやれば合併したくないけれども、仕方ないな」という派ですね。「初めから財政が破綻していて、吸収されるしか道はないのだが、できない話だけでも、失敗だから離脱しますって巻き直してできれば一番いいんだけどなあ。要は富士か静岡のどちらかを選ぶだけだということなのかなあ。その場合は実際に富士と静岡に住んで戻ってきた人に話を聞きたい。飛び地でもクロスしてもいいんだけど」という考えですが、多分それは無理だと思いますが。私としてはどちらへ結びついても活性化すればいいのではないかという考え方です。行政の区割りは関係ないという感じです。

もう1つは「合併して大丈夫か。サービス低下しないのか心配」ということです。「例えば、地震があって仮設住宅をつくるとしたら、土地はあるのかやあ。神戸とおんなじで断層が隠れていて、ひどいことになっちゃったらもうどうしようもない。例えば転用できるオートキャンプ用地はあるのかしら。富士川や芝川に頼まなきゃならないかしら。多分桜えび干してる河川敷とか、スーパーの駐車場とかいっぱいあるからさ、あそこへ車持ってって停めりゃええと思うだけえが、多分それは問題あるだろう。高架道路が通れなくなって、救急車が第2候補の搬送病院まで行くのに、どうしてやるのかしら」のように、本当に具体的な些細なことを考えているみたいです。

それから、「遠く静岡の市長がやってきて、蒲原のことをいろいろ交渉してくれるんだかしら。」地元でやるのではなくて、地元から区役所へ行って、静岡へ行って、今度は例えば富士のほうへ行って、富士から芝川に来て、皆そういうぐるぐる回ってしまって何だかのよ
うな、そのなようなことも心配しているみたいです。つまり、やはり見捨てられてしまうの
かというようなことが心配みたいです。その辺のところは私のところではわかりませんから。

一番強力なのは「何も変わらんら」という意見です。「結局清水区ということで名前が戻
ったとしたら、合併しても変わったことは清水市長がいなくなっただけのことずら。それと
同じだと首長が2人いなくなるだけのこと。」これはかなり冷めた意見です。実際難しいだ
ろうと思いますけれども、また後で話します。

オブザーバーとしての意見というわけではないのですが、「離脱した富士川町の意見は排
除されて、こういう発表会を公表されませんが、そういう人たちは静岡と合併することをど
う思っているのか一番心配。」ある程度庵原郡の町で集まれば発言権が増すのではないかと
いうようなことを期待しているみたいです。芝川とかあちらのほうからも、富士とか富士宮
のほうが多分近いでしょうから、あまり変わらないと思いますが。

ほかにもいろいろあったのですけれども、由比のほうで反対意見ということでかなり出て
いましたので割愛させていただきます。

他にもいろいろあるのですけれども、またほかの発表者の方がされたりすると思うので、
あとは私の感じたことを言うだけですから、気楽に聞いてください。

静岡の合併では静岡市民はあまり関心がなかったようです。せいぜい清水がなくなってか
わいそうというくらいです。今回は、はっきり言うと残念ですが、関心はゼロです。合併に
ついて政令都市化にかかわるので、かなり全国的な注目を浴びているとは言われていました。
テレビでかなり前に政令都市化を前提にした番組がやられたことがあるけれども、そのこと
も自分の町に関係あるかもって考えた人はどのくらいいるのでしょうか。番組自体も尻つぼみ
になってしまって、その理由は多分成功例がないからです。

そこで、さいたま市です。さいたま新都心駅というところに大きなビルがあったのですが、
駅に降りたら駅前に「世界一ののっぽのビルをつくろう」と垂れ幕がかかっていました。昨
年の暮れも普通の2倍くらいの大きなショッピングセンターができていました。巨大な「船
橋ららぽーと」というショッピングセンターがあるのですけれども、大体それと同じくらい
です。ですから200万人くらいの都市になるのではないかと思います。空き地があつて自
由に都市計画の線引きがなくても、水とごみとし尿で限度があると思ったり、高いビルから

下界を見下ろして、アリみたいな人間から税金を取ることに痛みを感じてないかと思いました。

時間ですから話がこちらに行くのですけれども、些細なことですが、駿河区の名前は私はきらいです。区役所をつくる予算がないらしいからだが、私としては分区してくれればうれしい。多分こちらのほうもそのような思いだっていると思います。

合併するにしろ、しないにしろ、自分のことを考えてアイデアを出す人が少しでもいるという点で捨てたものではない。明るいと思います。静岡市を暮らしやすくすることも引き続いて考えていただければうれしいと思います。どうも御清聴ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

次に、蒲原町の鷺巣裕子様に発表していただきます。鷺巣様よろしく申し上げます。

鷺巣裕子様 御紹介にあずかりました蒲原町の鷺巣と申します。本日は合併協議会委員の皆様に向けてといたしますよりは、傍聴席にいらっしゃる住民の皆さんにぜひ聞いていただきたい、お伝えしたいことがあります。住民側から見た純粋な合併の目的とは何かをテーマに、これより発表をいたします。

今、全国の中小都市の商店街がシャッター通りと呼ばれています。なぜこのような現象になってしまったのでしょうか。確かにシャッター通りは、1970年代から始まりましたモータリゼーションによってつくられたと言っても過言ではないと思います。ですが、その陰に、実は目立ちませんが、大店法という法律がシャッター通り化をする1つの原因ではなかったかということをお本で読みまして、私は1973年に制定されました大規模小売店舗法、いわゆる大店法ですが、これを仮にAとし、平成の大合併推進に対する反対論を、これを仮にBとしたならば、AとB両者には共通する要素があると、このように考えました。

まずAには、大店法ですが、規制法で保護されたことによる小売店、商店の法律に対する依存と寄りかかりがあったように思います。そして、Bには、Bというのは合併推進に対する反対論のことですが、こちらにはこれまで中央集権であった国のお膳立てに対する国民の甘え、寄りかかり意識、こういったものがあります。AとB、これはどちらにも共通する要素です。依存、寄りかかり、こういったものは、自らが行動しなくても、そのうちに黙っていたら何とかなるだろう、誰かが良くしてくれるだろう。そういった甘えが全面的に働きまして、そこには既に主体性を欠いています。

規制緩和が進んだ現在では大幅に規制が緩められ、さまざまな特区も設けられつつありますが、規制色の強かった1973年、大店法が制定されました当時は、小売店の正常な発達を図るために、大型店とその周辺の小売業との利害を調整するためにつくられた法律と聞いております。ですが、大型店にとって大店法は本末転倒であり、古くから商店街の近くに店をつくることはなかなかもって面倒でしたので、かえって郊外へ店をつくるようになりました。結局それがどんな結果をもたらしたかといいますと、人は車という足を使ってそちらへ流れてしまい、徒歩や自転車でも十分であった地元商店街には人が来なくなってしまったのです。小売店、商店はそれまでの既得権益や許認可制度を守りたかったのだと思います。そこへ人口・産業・都市空間の空洞化が、さらには車社会が追い討ちをかけ、シャッター通りへの移行が始まったと言えるのではないのでしょうか。

国の財政は金利の支払いに追われ、破綻寸前と聞いております。地方は地方で、地域は地域で立ち上がるためには、町に競争を生み、互いに競わせることなのです。企業で言う利潤追求目的の競争もありますが、その前にこういった地方の小さな町では、まず住民同士が互いに影響をし合い、刺激を与え合い、よい意味での競争が求められます。向上心や覇気を高めるような、よい意味での競争が求められます。

町は高齢化し、人口減少していきます。高齢者の増加、人口の減少、これらは現実として受け止めなければなりません。敵のいないのん気な池の中の鯉であってはならないのです。モータリゼーションが進展したことで、街中の商業地域の空洞化が進む対策には、求心力を付け、街中に人を呼び戻す必要があります。商業活性化の実現です。

町は高齢化し、生産力低下により経済の規模は今後縮小されます。住民の皆さんの視点を変えた柔軟な発想や新たなアイデア創出が不可欠になってきます。なおかつそこに厳しい状況が置かれれば、人は生き残るために必死になります。必死になった町には覇気や向上心が生まれます。そして町がそこで初めて光ってくるのです。唯一、競争こそが高齢化した町の活性に最も有効な手段であると、そのように考えます。

今以上に商店街がシャッター通り化しますと、町から商店が消えていきます。それまで自分たちが利用してこなかった商店が町になくなっていくということになり、車の運転が次第にできなくなる高齢者はそこで暮らしていくことができなくなります。そして、何の変化も工夫も見られない町は、やがて捨てられ、若い住民は出ていきます。住民が自分たちで人の住めない町にしてしまっただけではいけないのです。

言っても変わらない。確かに今まではそうであったと思います。これからは住民の皆さん

の手で変えていけるべきものでなくてはなりません。地域の利益が地域に再投資される。訪れるたびに違った発見がある。そんなまちづくりを住民の皆さんと一緒に考え、協働で実行に移すべき時代にならなくては、そのような時代にしていかなくてはならないです。

今、地球の裏側まで瞬時に情報が走ります。情報網の発達で青い地球も狭くなったと言われますが、世界はまだまだ広いです。狭いエリアに閉じこもり、自身の可能性や視野を狭めて暮らして、どんな意味があるのでしょうか。増加する高齢者がもっと生き生きと年齢を重ねられる町を目指して外へ飛び出してください。環境はそこに住む人の資質を決定し、人を育てます。合併により外側から客観視することで、今まで見えなかった町の課題、問題点ははっきりしてきます。合併は住民にそのような気づきを与えるチャンスでもあるのです。合併が新たな町の1ページとなることを願っております。

蒲原は小さな町でありながら、独自の雰囲気を持ったまちづくりができていない成功例だと、そのように聞いております。しかし、町の歴史・伝統文化を維持し、ただ保っているだけでは町の維持と発展にはつながりません。水はたまっていたらやがて濁ります。町も同じです。新しい水や風を入れて、それらを循環させてください。私は合併により、時代に遅れた町の古いシステムや旧態部分の体質改善を求めます。そして次の世代がこの町に夢や希望を得られるような地域づくりを住民の皆さんと一緒にできることを願っています。進歩することはまず町が変わることであり、今がその変わる時なのです。拒否や苦痛を伴っても、変わる努力を迫られる厳しい時代だと思います。

合併をすれば良くなる、悪くなるといった低次元の問題ではないのに、町が保障されるのか、のみ込まれるとか、単純に考えられてしまうことをとても残念に思っておりました。これはどちらも依存なのです。依存には発展はついてきません。必要なものは住民皆さんの自立なのです。自立は自ら考え動くことによって周囲に影響を与え、人も動かしていきます。町をつくり社会を形成していきます。小さな町は合併により削除されるのではなく、町の再編とともに上書き保存されて残っていきます。更新された結果と内容は住民の皆さん次第になります。

合併を契機に、課題山積の現状をいかに切り抜けるか。合併イコール町の発展となるか否かは住民の皆さんが鍵を握っているのです。自ら考え動く1つの歯車に住民の皆さんがなってください。歯車を回すチェーンとして、育成された人材を受け取る受け皿体制の確立と、住民と行政が互いに双方向性を持った協働システムづくり、入れ物づくりが最初の課題とならなくてはなりません。住民の皆さんには、視野を広く高く持ち、遠くを見ていただいて、幅

広く新市の中でグローバルな人材育成を目指したいと思います。

合併されて住むところは大きくなりましても、住民の手による地域の特性を生かしたコンパクトな町が日本中に広がり、またそれぞれがそれぞれの地域で競い合うことを願ってやみません。まちは自らつくるのだという情熱を継続してください。幾ら政令市という立派な肩書きをもらっても、中に入る人間が何もせず、のほほんとしていたのでは、何ら市や町は変わりません。耐震機能の文化センターや立派な道路をつくって箱物だけを飾り立てても、それだけではだめなのです。申し分のない立地条件や店構え、商品を並べても、店主に商売をやる気がなかったら店は繁盛するでしょうか。合併もまちづくりも商売も、原理は同じなのです。

地方分権化が進みます。住民の皆さんが平生まちづくりにもっと関心や興味を持ち、一人一人がチェック機関となってください。住民の前向きな気持ちが町をつくっていく一番の原動力となり、かつ、この先地域が向上発展する一番の近道となります。その覚悟を持って今はまず合併であると、そのように考えております。

最後になりましたが、大店法は大型店の立地に際し、周辺的生活環境との調和を図ることを目的に平成10年6月に公布、平成12年5月に最終改定されましたことをここに付け加えておきます。以上です。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

次に、静岡市の森 美佐枝様に発表していただきます。よろしくお願いいたします。

森 美佐枝様 静岡市清水から参りました森 美佐枝でございます。よろしくお願いいたしますします。4番目となりますと皆さん大分疲れが出てきていると思いますが、あと2人ですので頑張っていたきたいと思います。

2年前に清水と静岡が合併いたしましたして、そのころ、2年前のちょうど今ごろですが、我々、清水滅亡の日まであと何日というカウントダウンをしておりました。宇宙戦艦ヤマトはどうとうイスカンダルに行ってくれなかった。もう本当に清水がなくなってしまったということで、私たちは非常に悲しみました。清水が好きでたまらなかつたので、何で清水がなくなってしまったのだと思いましたけれども、もうなくなったものを言ってもしょうがないと。それならば、清水を元気にしていこうではないか。静岡のほうから見たら、「あっちの港のほうはやたら元気でいいよね。思わず引越しちゃいたくなっちゃった」という町にしようぜ

ということになりまして、あれこれ言っているより、とにかく元気出そうぜ。そういう方向に変えました。

それでいろんなことをやっております。そのうちの1つとしまして、マリンパルという、エフエム清水のラジオ局がありまして、そこで「ますます元気清水60分」という番組をつくりました。これは清水が好きで好きでたまらない人たちが集まって、清水への想いを語ろうという番組です。

清水が好きですから、とにかくもうなくなってしまった清水ではなくて、これからの清水をどうしようかというのを考えよう。例えば、清水の駅前の商店街。先ほども商店街が大変という話が出ました。清水の商店街は人が来なくて、商店主が暇なのです。だからじっくり話を聞いてあげますからぜひいらしてください。静岡へ行くと「はい」ってお金払って終わり。でも清水へ来てくれるといろいろな相談に乗ってあげられるから、おいで、清水に。そのような番組です。

それから清水といえば清水の次郎長ですから、こうなりゃ「仁義の切り方教室」やろうじゃないかと。皆さん方、地方へ行っているところなどで御挨拶するとき、「森でございます」と言うよりも「お控えなすって」ってやったほうが印象に残りますから、清水の人間は全員が仁義が切れる町にしようか。こうしてやったらどうだろうかなんていう番組をつくり、その中に蒲原町長にも当然出ていただきまして、「蒲原にはな、桜えびがあるんだ。桜えびはうまいんだぞ。この桜えびを皆さんに知らせたい。」それとか、塗装業って言わなくてはいけない、ペンキ屋さんと言ってはいけないそうで、「塗装業の技術を持った職人さんたちがいっぱいいてな、魅力のある町なんだぜ、蒲原は。」と言いながら少し番組の話などをしていただきました。というお話が出てきますと、なかなか、蒲原もいい町だなあ。清水の人たちとも少し合うところもあるし、うまくいきそうな感じがします。

それで、自分のところはいいぜって言うのってなかなか難しい。例えば、私はいいい人だからさとは言えないけれども、あの人いい人だからねって言うとすごく実感がある。清水の人が「蒲原、いい町だよ。蒲原の人っち、いい人っちだぜ。」と言うと、ああそうかなと思ってしまう。清水があれよこれよと言ってないで、蒲原と一緒にしてお互いに蒲原の人たちと清水はいいい人たちだよって言ってくれればいい。蒲原いいとこだよって言うのと両方が元気になる。挟まれた由比だっただ黙ってはいられないと。そういうことになりますので、ますます皆様も元気になるかもしれないなと思いますので、ぜひ一緒になって港のほうを元気にしたいと思います。しつこく言いますけど、港のほうを元気にしていきたいと思います。

要は、静岡と清水は違うのだということを強く言いたい。今私たちは、清水のJR駅前の地下道に絵を描いております。静岡の駅前の地下道ってとてもきれいになって、明るくて非常に環境はいいです。清水の地下道は汚いです。真っ暗なのです。落書きがいっぱいなのです。でもその落書きを消そうではないか。消しても消しても描かれちゃうのだったら、先に私たちが描いてしまおう。それで絵を描きました。清水の想いを描きました。七夕祭りがあります。港まつりがあります。港があります。こんなにいいまちですという絵を、皆で下手な絵を描いたのです。上手な絵は静岡で描いてください。下手な絵を描いたのです。

なかなか好評で、もっと描きたい、描きたいって言う人が出てきましたので、今は募集をかけてまして、実は明日選考委員会があって、もうあと10何項目描くスペースをつくりました。今2コマあけてあります。蒲原さんに描いてもらおうと思って。あとでまた御相談しますので、ぜひ蒲原の人たちも清水に来て清水の地下道に絵を描いてもらいたい。蒲原への想いを描いていただきたい。蒲原っていいなと思うような、そのようなものをぜひ描いてもらいたい。蒲原にとどまるだけではなくて、清水と一緒にあって一緒に頑張ろうねと。そういうまちづくりをしていきたいと思います。

2年前に私たち清水は、静岡に嫁に行ったと思っております。名前は静岡になってしまいました。2年間一緒に暮らしました。でも結婚して2年間。最初の2年間は、こんなはずではなかったと思ったことがいっぱいあると思います。そう思いませんか。だって、あのときの口説き文句はあれだったのに、一緒になったら何ということがいっぱいありませんでしたか。ありましたね。それと同じで、我々は今、いろいろとあるのですけれども、嫁さんというのは子供が生まれると強くなるのです。場合によっては、蒲原君という長男が生まれるかもしれないなということを願っています。場合によっては、由比ちゃんという双子かもしれないなと思っています。

清水という嫁さんは、由比と蒲原という子供を得ますと、静岡というお父さんよりぐんと強くなるのです。静岡のお父さんは、いっぱいお金を稼いできてくれて、日曜日は寝ててくれればいいのです。清水と由比・蒲原が元気に働けばいいのです。お金をいっぱい使ってしまえばいいのです。静岡は寝ててください。そういうまちにすれば絶対に元気になります。皆さんのうちだってそうです。お母さんと子供が元気ならば大体いいのです。お父さんは稼いできてくれて、何も言わなければいいのです。そう思いませんか。蒲原は長男だと思しますので、ゆくゆくは長男が偉くなる。蒲原の町になるのではないかなと思います。

そのように考えると、何だかわくわくしてきませんか。静岡県という小姑もそのうちいな

くなりますでしょうし、お国さんというおばあちゃんもそのうちいなくなりますし、力もなくなりますでしょう。清水と静岡が合併して何だかんだ言っているよりも、長男・長女が生まれて一緒になって元気な静岡というファミリーをつくっていきたい。そのためにはやはりお互いの良いところを認め合って、手をつないでいいまちにしていって、ここであれこれ言っていないで、本当にこんな良いまちになったのだと言えればいい。ここで、あれこれ言っているとほかの人たちも、そのまちは魅力ないなと思ってしまう。うそでもいいから、合併してよかった、よかった、よかったって言えば、あの町は良いまちになると、私としては思います。できれば声は大きいほうがよい。そのためには皆一緒になってほら吹いて言っているうちに、10年後ぐらいには、ほらが本物になります。良いまちにきつとなると思います。

立派な市長さんもいますので、多分、そのころにはとっても良いまちになると思いますのでそれまで一緒に頑張っていきたいと思います。頑張りましょう。終わります。

司会 ありがとうございます。

それでは本日の意見発表者の最後になります。蒲原町の井上博章様に発表していただきます。井上様よろしくお願ひします。

井上博章様 どうも皆さん、5人目ということで、発表者の井上と申します。森さんの後ですごくやりにくいのですが、書いてきたものがありますので、早口になると思いますけど、読ませていただきながら、私の意見とさせていただきたいと思います。

冒頭に、すべての協議会を傍聴させていただきました。住民説明会にも参加させていただきました。政令市の準備でお忙しいにもかかわらず、静岡の前向きな対応には本当に感謝申し上げます。

では、本日の発表に入りますが、昨年11月に公募したときの原稿を概略述べて、そして8回、9回の合併協議会の説明を受けた意見を述べたいと思います。

合併協議会も予定された第10回を残して本日の意見発表会を迎えたわけですがけれども、思えば私としては、蒲原町の合併は私の関わったここ数年にとどまらず、先人からの願いと考へて臨んできました。

応募した原稿では、地方の情報も掲げながら、戦後の中央集権体制は反省すべきだったこと、そして行政の合理化の方法として合併は自治体の常時努力義務である点を確認しています。そして、115年間も合併しなかった蒲原町の怠慢さとあわせてこれを許容していた住民

の意識改革の必要性から、静岡との合併をチャンスとしたいと思って意見を述べております。

そしてさらに、自由と社会のあり方から始まり、IT化、グローバル化、多様化などの進展による激化する社会変化。少子高齢化は言うに及びませんが、これを踏まえて私たちは多面的な価値観の見直しを迫られているため、社会にも政治的にも当事者意識を強く持つていくことの必要性を主張しております。そして「行政と呼応し合う新しい協働の要である協議会を出舟とし、船団：政令市静岡の一翼を担います。ここに新生静岡の町づくりの先駆者として蒲原が生まれ変わることを期待しこの合併に賛同します。」というように結んでいます。

さて、これは提出した資料の内容を概略読ませていただいたのですが、次の意見を述べる前に、合併に賛同する点は何ら変わっていないことを確認させていただきます。少し反対のようなイメージに聞こえてしまいますので。

第10回の決定事項である自治組織についてですが、後ろの委員の方以外は8回、9回の議事録等はお手元にないせいもありまして、新聞等の掲載の情報だと思えますけれども、私は7月ごろからその辺に注目するとともに、合併協の展開にいら立っていました。一時期は、合併協は不勉強だという概念から、9月21日にはこの意見書と資料を添えて、ぜひ合併協で使ってほしいということを提出した。これはお願いですから、採用されなかったことについては、別に恨みも何も持っておりません。そして、住民の皆さんには多分ここにある地域自治組織については、資料としてこのような三者択一のもので説明されていたと思います。地域審議会は従来の特例法によるもので、たったこれだけの条文です。そして、合併特例区は、やはり改正された特例法によるものですが、このあとにすごく長い条文がありますけれども、合併協の初期の段階で対象外というような形でイメージされてしまいましたので、ここでは話を省きます。

そしてもう一つ、地域自治区について、お話させてもらいます。改正した地方自治法で定めたものを、合併に際し条文を動かした組織です。すなわち自治法で定めた地域自治区の条文を、付加したもので定めたものです。合併で定めたことというのは、区長のことと、機関のことと、名称のことだけなのです。要するに地域自治区は地方自治法に基づく組織であるということで御理解いただきたいと思えます。

少し脱線しましたので、少し修正します。そこで地域審議会と地域自治区の二者択一なのかということなのですが、私は昨年7月の時点でこの両方の設置を提言したことがあります。しかし、合併協では二者選択の協議に終始したように私は思えてなりません。また、地域自治区の事務所については、一般行政の単なる支所、出張所の機能に地域協議会の章が

付加されただけなのです。行政権限の論点から多くの時間を費やしたと、残念に思っております。

なお、これ以降の地域自治区の地域協議会は協議会と表現し、地域審議会は審議会と表現させていただきます。

さて本題ですけれども、9回の合併協での、由比は協議会、蒲原は審議会を決定しました。設置する根拠法の違いがあるにもかかわらず、報酬以外はほとんど同じです。由比の協議会は無報酬ですが、蒲原町の審議会には報酬があります。蒲原の審議会は、協議会の体裁を整えているので、選択した理由は、報酬があるからだということになります。なお、由比の協議会の無報酬については、私の解釈は、何でも無報酬とするのではなく、行政から諮問要請などがあった場合について、費用弁償程度の支払いはあってしかるべきだと思っております。

ここで協議会の原則無報酬について着目していただきたいと思えます。従来の地域審議会の制度があるにもかかわらず、地方制度調査会の答申に基づき、地域自治法を改正してまで新たに設置できるようになりました。この答申の中に、地域協議会の構成員は、地域を基盤とする多様な団体及び公募による住民から選び、その住民の主体的な参加を期待するものであることから、原則無報酬とする、と述べられています。つまり、地域のこと全体について、住民自らが、行政とともに当事者意識を持ち、自由に課題を掘り起こし、力を合わせて行動するという協議会に報酬はそぐわないものだとしている。そして、住民の主体性を、報酬を支払うことの弊害から隔離していくような考え方だと、私は解釈しています。

このように、この協議会は、従来の、行政が主体となり、ある一定の席をもって設置された何々審議会、何々協議会とは明らかに違います。法律で権限を明確に、報酬への考えを示すことで、住民への権限移譲とともに、住民の行政に対する当事者意識の醸成の場を前提にしています。

新しい概念のせいか、理解しがたいとは思いますが、あえて原則無報酬としたことの重要性と、協議会と審議会の本来の姿の違いを再認識していただきたいと思えます。また、住民として、合併するに当たり、地域の要となる協議会は、住民の主体性の育成の源であり、合併の成否にかかわる重要な要素で、絶対に必要なものだと思っております。

静岡の協議会での御理解をいただき、この選択肢を出したにもかかわらず、蒲原の町議会を模倣した審議会の選択は容認できないものがあります。よってここに、地域自治区の決定を差し戻し、再協議していただき、地域自治区の設置を願い、合併協議会の全委員の皆さんに、よろしくお願い申し上げる次第です。

時間が来ましたので、これで終わりにいたしますけれども、よろしく願いいたします。

【閉会】

司会 どうもありがとうございました。

本日は貴重な御意見をいただきましてありがとうございました。

本日皆様から寄せられた御意見等を踏まえまして、合併協議会では1月28日に、合併の是非決定を行うこととしております。静庵地区の将来にとって重要な決断となるこの是非決定に向けて、合併協議会としましては、全力を挙げて取り組んでまいりますので、今後とも皆様の御理解、御協力をよろしくお願いいたします。

以上をもちまして、本日の住民意見発表会を終了とします。長時間ありがとうございました。